

# 現在の日本文化における 男性同性愛

ローラン エリック  
(Erick LAURENT)

1. 方法論
2. 日本におけるゲイのコミュニティ
  - 2.0. いくつかの相違
    - 2.1. ケース・スタディ
3. 日本の男性同性愛的なアイデンティティへ
  - 3.0. 言葉遣い
    - 3.1. 法的な立場
    - 3.2. 同性愛に対する潜在嫌悪
    - 3.3. 相違・特性
    - 3.4. 結婚
    - 3.5. ネットワークの重要性——閉じた世界
    - 3.6. 活動主義の状況
    - 3.7. 最近の傾向
4. 結論として

日本学では、文化人類学者や社会学者、歴史学者でも、性、いうまでもなく同性愛に関する諸現象さえもあまり取り扱っていない。それと同じように、特に英語系の国々で盛んであるいわゆる「ゲイ&レズビアン・スタディーズ」(同性愛学)は、西洋の諸文化以外のデータが著しく不足している。この二つの道の交差点で、日本における男性同性愛の特殊性を見つけ、その背後に存在する日本で男性同性愛者のアイデンティティが形成し合おうとしている文化

的・社会的な要素を見付け分析することが、この研究の主な目的である。

## 1. 方法論

文化人類学上の研究は、参与観察や、インタビュー、ゲイ雑誌の分析、自分の個人的な経験（同性愛についての演習など）に基づいている。

参与観察は、日本でのゲイ・シーンや様々なゲイの世界でのイベントで行われた。つまり、「東京レズビアン&ゲイ映画祭」(2000年, 2001年), 「レズビアン&ゲイ・パレード」(2000年, 2001年), 「東京レインボー祭り」(2000年, 2001年), 諸ゲイ・バー, そして主に東京, 京都, 静岡, 那覇の公園, サウナなどのいわゆるハッテンバといわれる所で行われた。京都では、私が生活している場所でありながら、10年間以上ゲイのコミュニティのメンバーたちと色々な形で毎日のように出会っているので、自分の“場所の歴史”のせいで、フォーマルな現地調査(特に参与観察)を行うのは全く可能ではない。しかしながら、いくつかの仮説を証明するために、その10年間以上にわたる京都で感じた印象、バーで聞いた打ち明け話などを本研究のデータとして利用した。さらに、東京、特に新宿二丁目は、確かに日本のゲイの世界を理解するために必要不可欠のトコロである。けれども、日本における男性同性愛について研究をするための代表的な場所と考えられないし、新宿二丁目だけが別の研究の対象になるべきである。それ以外の枠で、日本全国において代表的だと思われる、それほど大きくない都市で現地調査をしたかったのである。結局、静岡と那覇を選択した。静岡を選んだ理由は、まず私がそこでは完全に未知な人であり、そしてゲイ・バーが少ないので、比較的短い時間で全状況を取り扱うことができるということである。しかも、全国に出す前に新しい製品を検討するために、様々な会社がテスト販売の代表的な場所として、しばしば静岡市を利用するということもある。それに対して、那覇を

選んだ理由は、後で説明するように那覇市でのゲイ・バーの軒数が大変多くて、同性愛に対して特別な立場にあるということに関連している。

この両都市では、男性同性愛者の26人（平均年齢は35.11歳）にライフ・ヒストリー（生活史）のタイプのインタビューが取れた。彼らの社会での特別な位置のため、殆ど28歳と35歳の間の人々を選んだ。なぜなら、ゲイたちにとっては、文化・家族からの結婚に対するプレッシャーのせいで、グループに対しても自分自身の性的指向に対しても自覚しなければならないし、性的指向のような性的現象の社会的な表現をしっかりと決めなければならない接点時期を調べたかったからである。つまり、特に日本では、いくつかの意味で周りの異性愛社会化に対する不安さを強く感じる時期である。それ以下の年齢（ほぼ25歳まで）の同性愛者たちは、無意識的に、プライベートの世界で、それほど問題なしに自分の同性愛性を生かすことができる。それ以上の年齢（ほぼ33~35歳から）の同性愛者たちは、結婚や、カミング・アウト<sup>1)</sup>、性的指向の問題点に対して、すでにはっきり位置付けたはずである。

質問事項は三つの軸によって構成することにした。それらは、まず自分の性的指向の理解・受容や、日常的なその生かし方・表現の仕方というアイデンティティ；次に同性愛者・異性愛者のタイプや彼らとの出会い方、ゲイ的なイベントへの参加、同性愛者としての社会における立場・位置、同性愛的な準拠（有名人、本など）というコミュニティ感；最後に日常生活やそれ以外の時間・場所で“同性愛”的と意味された場所に訪問するという社会化、という課題である。それらが理論的順番で置かれたのであるが、もちろんお互いに関連しているという風に考えざるを得ないのである。

フィールド・ワークのとき、特に若者が利用するバーでインタビューを得るのが難しかったときもあった。インタビューという言葉が出てくるだけで、もうそれ以上聞きたくないという人もいる。はっきりと秘密の世界であるけれども、信頼関係の構築ができれば、逆に話を止められないぐらい、同

性愛者があまり自分の性的な経験について話す機会がないように見えた。自分のゲイとしての生活や性生活、日本社会と同性愛との関係について考えるチャンスを与えてくれたと、私に感謝の言葉をくれた人もいた。

この研究において、一方では、文化の差異を無視しようとしているゲイの精神的・行動的相似を中心に行っているいわゆる全同性愛主義ということと、また他方では、同性愛における日本の特殊性しか見えない文化主義ということから避けるように留意した。

## 2. 日本におけるゲイのコミュニティ

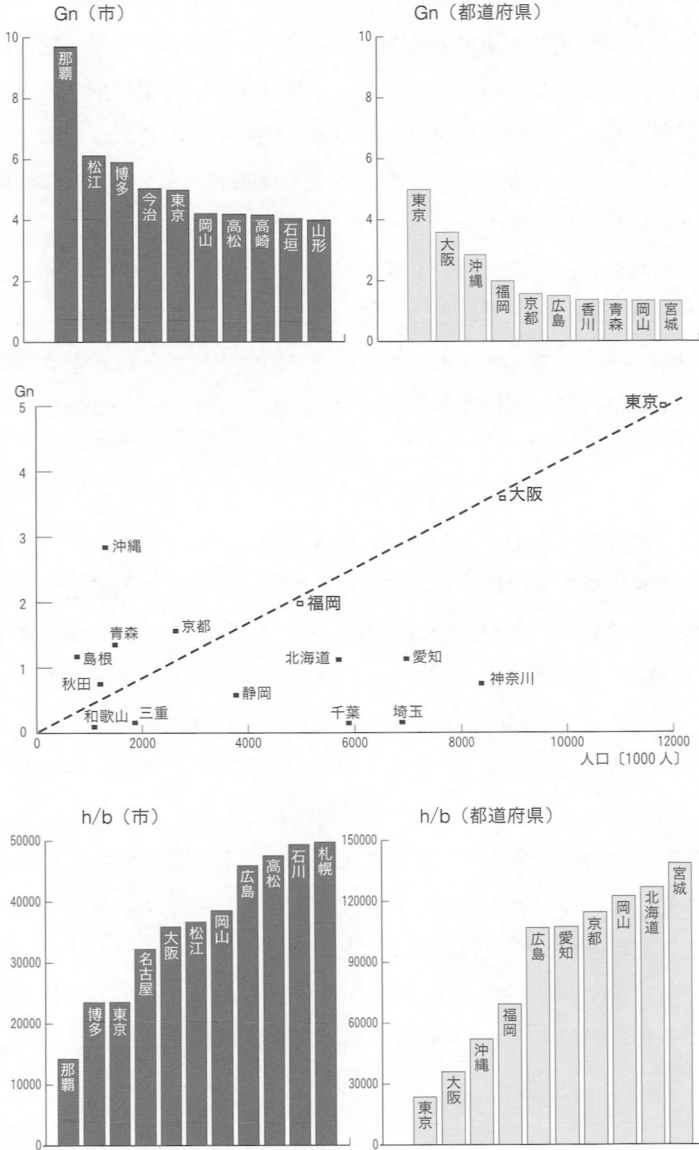
### 2.0. いくつかの相違

同性愛のコミュニティに対する全国の展望を得るために、人口に対するゲイ・バーの軒数やハッテンバの所数、ゲイの本屋の軒数などに基づいて、ある町や地方における「ゲイ活動指数」を考えることができる。すなわち定義上で、 $G_n$  は、人口におけるゲイ的な場所（バー、ホスト・クラブ、公園やサウナ、クルージング・ボックスのようなハッテンバ）の所数の割合である。 $G_n^{2)}$  は、絶対的な数値を持っていないが、ある場所でのゲイの活動率について示している。いずれにせよ、比較する目的だったら、使用しても問題はないであろう。また定義上で、 $h/b$  は、一軒のゲイ・バーにおけるある町とか地方の人口の割合である。市<sup>3)</sup>の 74 そして県の 44 に数えられたこの二つの指数は、諸市・県の間に相違が存在しているということ、つまりゲイ活動では日本が不均質であるということを示している<sup>4)</sup>（三つのグラフを参照）。

そうすると、同性愛者の世界では、同性愛性を生かすため、集中点という



現在の日本文化における男性同性愛（ローラン）



役割を演じる大きな活動的核が存在しているということが分かる。例えば、北海道にとって札幌、関東地方にとって新宿、中部では名古屋、関西にとって大阪、中国の北部では松江、四国にとって高松、九州では博多。ゲイ活動では、那覇市もしくは沖縄の全体は、日本全国の内、特別な立場・位置を占めているということも分かる。埼玉県と千葉県は、完全に東京に従属している。それに対して、横浜市はゲイの活動において独立の場所として存在している。関西にとっての大阪でも、同じような現象が存在しており、紀伊半島は「ゲイ不活動」の大きな帯として現れてくる。東北、特に青森県において、Gn 指数が高くなる理由は、同性愛者が出会う所が多いということであるが、多くの場合では同性愛者だけの専門的なハッテンバではない。青森市を除けば、ゲイ・バーだけを見ると、指数は高くない。

日本におけるゲイ活動では、都会と地方の古典的な差異が確かに読み取れるが、全国的にやや一律に分布している集中点の存在、そして逆に地方間の相違の存在のせいで、この差異はそれほど重要ではない。例えば、沖縄（特に那覇）は特別に活発な地方（市）で、逆に紀伊半島や日本海に沿う地域はそうではない。ゲイ活動の活発な場所における、同性愛者としての生活は、そうでない場所と比較すると、かなり相違が存在する。すなわち、本当の意味での不均質的なゲイ・コミュニティが存在しており、そのお陰でスポーツや、娯乐的・社会的・政治的な活動まで可能になる。同性愛者としての自分を受容するには、このようなコミュニティ化がとても重要な要素である。小さな町では、自分が同性愛者であることを知られてしまうのではないかという恐怖で、同性愛者たちは、無力化されてしまう。そうすると、共同の活動さえ無理となってしまう。

## 2.1. ケース・スタディ

### 2.1.1. 静岡市

静岡市では、48万人の人口で6軒だけのゲイ・バー、1軒ずつのゲイのラブ・ホテル、ゲイのビデオショップ、中心から離れたクルージング・ボックス（下記に例えあり）があつて、ゲイ・シーンは比較的に静かである。ハッテンバが三つあるが、同性愛者の専用ではない。静岡のゲイ・コミュニティはあまり統一してなくて小さく見えるし、多くの同性愛者が東京や名古屋へ遊びに行く傾向がある。

バーは町の中心に分布しており、地方の他の比較的小さな市（岐阜、長野など）との共通点がありながら、二つの明確に違うタイプで分けることができる。まず（例えば「フリーダム」、「サード」）若い客は、喧しく、あまり飲まず軟派をしない、主な目的が自分の同性愛を肯定・強調・表現すること、という人々である。次に（例えば「ミモレ」、「ジュン」、「アス3」）比較的により年上の客は、会合することや若者を軟派すること、ニュースを交換すること、コミュニティ化的な絆を強調すること、という主な目的を持つ人々である。最近、つまり時にはカウンターの後ろまで女性がいることは、「ジュン」に特別なイメージを持っているので、現地の同性愛者がイライラしたり眉をひそめたりする。この二つのタイプの間にある「ブルース」がハイブリッドのステータスやマスターの性格のせいで、最も人気のある場所だそうである。

静岡で1軒だけのクルージング・ボックスは、「性に関するだけの基準、定義に基づいた同性愛のとても浅ましい汚れたイメージを伝えてしまう。これは、新幹線の高架の下にあり、どぎついネオンからピンク化されているただ一つの小さな窓を持って、都市の駅の不気味で汚い裏道だけに、見付けられない場所である。中には、ややもしくははっきり性的な物やポルノ・ビデオ、ゲイ雑誌の数えられないがらくたの山がある。小さなカーテンの後ろから、

ビデオ・ボックスへ行ける。利用方法は少しややこしくて、2000円を払った後、靴を脱いで一本のビデオを選ぶ。それから、ボックスの鍵をもらって、その後のアソビというのは、真っ黒の所で進みながら自分のボックスを探し、少しの光をもらうという意味だけでビデオを入れることになる。それから、何でも良いという感じ。狩猟はオープンになる。セックス・フレンドを探している人々が電話をかけて来るから、しばしば鳴る各々のボックスの隅にある電話で話すこともできる。場所はとても狭くて、ボックスは小さく汚い。そこから、性的な深い苦痛の匂いがしてきた。」(フィールド・ノート、2000年8月12日)

これと同じようなシステムの、ゲイ・ビデオクラブは、店内がより広くて、性的な玩具(クリントン前大統領の反ストレスのゴムのペニスまで買える!)がより多くて、全ビデオの内わずか1/4がゲイ専用である。静岡駅の南方の寂しくて埃だらけの郊外にある、この店の全体的な雰囲気も結構不気味である。

静岡のただ1軒のゲイ用のラブ・ホテルは、外側の様相があまり魅力的ではないけれど、2人連れの男性が問題なしで入ることができる性的な場所は、そこしかないのである。

駿府公園は、夕方から夜明けまで同性愛者でいっぱいになって、ゲイの出会える場所として代表的だと思われる。最近、野球のバットを持つ高校生がゲイ・バッティングをするという噂を耳にした。襲撃者の自白によると、これはただの反ストレス的な活動、乱暴な欲動のはけ口でしかないらしい。しかし、このような行動に対して、世間の一部は黙認している。最近出現したホームレス・バッティングの諸事件と似ていると考えられる。

中心から5キロぐらい離れた、時々ゲイ・ビーチと呼ばれている大浜は、水泳禁止(非常に強い潮のせいで)のやや長い浜である。一般の家族が夏の日曜日を過ごす静岡の浜である。しかし、その道から離れた一部が、同性愛者に“植民地化”されて、彼らは堤防を歩いたり、テトラポッド・ブロックのすき間でヤッターする。

### 2.1.2. 那 覇 市

静岡もしくは京都さえとも違って、那覇のゲイ・コミュニティは、意見やスタイルの多様性にもかかわらず、より活発的統一的なイメージを与えている。中型の市にしては大変多いと思われる、多様性を見せるゲイ・バー 20 軒、サウナ 4 軒、ホスト・クラブ 2 軒がある。バーの大部分が上手く経営しており、平日でも夜中遅くまで開けている。日本で那覇以外の所に比べて、ゲイ・バーが始まるのは遅くて、大体 8 時に開店して最初の客が 10 時に来るのは珍しくない。全てのゲイ・バーやそれ以外のゲイ用の場所は、面積の広くない桜坂に限られている。ここはもう一つの、より近代的な赤線地域と離れていて、国際通りと百合姫通りの間に広がっている壺焼の陶芸家や市場の古街である。「著しく潜在的な観光的な発展の可能性を持ちながら、小山や曲がりくねったアスファルト化されていない小道でとても魅力ある地域である。昼にはあまり起きていないという感じがするが、夜になると妙な雰囲気がある。桜坂を包み込む。つまり、常連たちが朝まで古めかしい飲み屋の間をそぞろ歩いて、年寄りの売春婦が、ほろ酔いのおじいさんを柔らかに引いたり、脚の長さのふぞろいな椅子に掛けたママさんたちが噂を交換しながらバーからバーへ行ったり、カップルで歩いたり手を繋いでいる若いオカマを見ている場所である。このように多様な人々は、仲がとても良いらしい。新宿二丁目のような本当の意味でのゲイ地域ではないかも知れないけれど、同性愛者にとってある意味でそのメリットを持っている。とにかく、同性愛者たちは、人気のあるレストランやブティックの間で酔っ払いのサラリーマンたちや若い男女のカップルが歩く少し贅沢な地区よりも、日常的により管理しやすいこのような暗いイメージのある地区の方が好きである。」(フィールド・ノート、2000年9月)

アメリカ時代に赤線地域だった桜坂で、1970年代の後期、「アキラ」、「太陽の子」のような最初のゲイ・バーが出現し、そして徐々に新しい店も開き、現在でも店の新陳代謝が頻繁であると言える。

### 3. 日本の男性同性愛的なアイデンティティへ

#### 3.0. 言葉遣い

殆どの言語と同じように、同性を愛する者の呼び方は、「同性愛者」のような精神・医学的な語彙と、「オカマ、ホモ、ゲイ、クイアー」のような有票の語彙の間に存在している。オカマは、形態的にお尻を意味して、行動的に肛門的な性関係を意味するのであろう (Leupp, (1995)1997)。英語からのホモやゲイが、さらに専門家の世界で「クイアー」(queer)があつて、それらは比較的に中立の表現である。ヨーロッパやアメリカの国々<sup>5)</sup>と同じように、最近、差別的な表現であつたホモなど、オカマまで、同性愛者たちから誇りを持ちながら普段利用されている。

#### 3.1. 法律的な立場

日本では、法律的な条文の内、家族法でも、売春防止法でも、決して同性愛/同性愛者が載っていない。この意味で、性的な関係が男性と女性間に定義されているから、同性愛の売春が禁止されていない。法律的には、同性愛者は存在していない。もちろん、「従つて差別も存在していない」とは言えない。同性愛者の存在が無視されているということだけで、それ自体が差別であると言えるであろう。そうすると、同性愛者は、同性愛への差別に対して、護られていないという意味もある。同性愛のせいだけでの過度な解雇は、比較的によく (インタビューを受けた人々の内に2人) 見られるが、もちろんいつも別の理由が援用されている。知っている限り、日本では、過度に解雇された同性愛者から、裁判を起こされたことがない。

### 3.2. 同性愛に対する潜在嫌悪

基本的に、早くても明治時代から、西洋の精神・医学的な論議に著しく影響された日本での同性愛に対する否定的な捉え方は、遺伝的障害と、精神的な問題、変態の行動ということである<sup>6)</sup>。はっきりとした同性愛の嫌悪的な行動は少ないし、最近（1992年から）一種の「ゲイ・ブーム」が出現したこともあった。しかしながら、カミング・アウトのケースは非常に少ないし、エイズに対する情報や予防の政策も非常に少ないし、ゲイ・バーやハッテンバは大変隠されているし、自分の“差異”を少なくするために結婚している同性愛者は著しく多く（ヨーロッパやアメリカに比べたら）見られるし、同性愛者解放運動はとても弱いのである。こういう場合、社会の中では同性愛に対して、寛容さよりも無関心が存在していると考えられる。つまり、日本の社会は、同性愛者たちが見られないように最低の存在性を抑えるということを期待しているわけである。要するに、同性愛嫌悪が潜在的であり、事実化されていないけれど、その可能性が十分ある。このような現象は、日本社会・文化における全体の“チガウモノ”に関連している。すなわち、差別、偏見、追放の的になる精神・社会・文化的な諸カテゴリーということである。

ここでは、個人的な体験について述べたいと思う。数年前、二年生用の「基礎演習」のために、「性の人類学」というテーマ、「ゲイ・スタディーズ」というサブ・テーマを挙げていた。しかし、教務課の反応は「演習の紹介は何も変えずに、サブ・タイトルだけを消して欲しい」ということだった。ちなみに、教員に演習のタイトルの変更を頼むのは、非常に希なことであると書かなければならない。何回か質問した後、ようやくその理由を教えてもらった。毎年、私たちの大学を、高校の先生が生徒たちに紹介するために、決まった高校へシラバスなどを送る。しかし、私の演習のようなタイトルは、「高校生にとって、強すぎる刺激になる」と言われた！ その演習が一年



生向けではないし、日本社会に関するあまり取り扱われていない課題について考えさせる、考え方の進化のために役立つ建設的な刺激であると反論した。しかも、人々の見方を進化させるのが大学の役割であると反論したが、馬の耳に念仏のようだった。「日本はまだまだ！」とだけしか言われなかった。このような事件から、現在の日本社会における同性愛に対する考え方・見方が理解できる：目立たない、言わない、カミング・アウトしない限り、問題なしで、“同性愛者”として生きていける。このような態度は、日本の社会全般に存在している同性愛に対する一般の気持ちと非常に近いと思われる。その後の演習の行い方は面白く思える。登録したのは、13人の学生がいて、女性5人、男性8人。このように多い人数は私の演習で初めてである。例年は、1人から8人までの学生が登録する。四角で置かれたテーブルは、スペースの特別な分担を示した。私の右側には、子供の身体している無口で臆病な4人の男性がいて、私の前には、面白くて厚かましくておしゃべりな5人の女性がいて、私の左側には、女好きの大人の役を演じようとする荒っぽくて猛者のような4人の男性がいた。猛者の4人とも「オカマって、むかつく」や「キスする男たちを見ると、汚ねえと思うしかない」、またあるいはやや攻撃的に「俺の息子がオカマだったら、殺すよ」と私に言った。13人は皆が、異性愛者であると言っていた。2回目の演習では、10人しかいなくて、右の男子学生の3人がもう来なくなった。この演習では、5回目まで学生の積極性が足りないと思っていた。そのときから、5人の女性しか来なくなった。このことは、彼女たちにとって、一種の解放だった。従って、そのときから、本当の意味での意見交換が始まってきて、時々精神療法のようなものになった気がしたし、授業の時間より約30分超えることも珍しくなかった。しかも、彼女たちは、アンケートのような個人的な研究も行った。最初はその目的ではなかったが、数カ月後、彼女たちが日本での同性愛者の擁護者のような人物になってきたということを見て、私は本当に驚いた。

日本の同性愛者は、何よりも、黙っていて隠している陰の人々である。事実、ヨーロッパとアメリカの状況とは全然違って、日本の同性愛者たちの極一部分だけがカミング・アウトしてしまった。インタビューに答えたゲイたちの大部分にとって、自分の同性愛を表すのは必要ではなく、仮面をつける方が良いわけである。何人かは、家族や友人などに女性の恋人や離れている“彼女”がいると言っている。個人的なアイデンティティのレベルで、カミング・アウトのメリットは、想像できるデメリットよりも少ないと言っている。デメリットというのは、日陰者として見られること、解雇されることなどである。彼らによると、カミング・アウトするということは、基本的に何も変えられないので、意味のない犠牲になる。彼らの大部分は、特に両親に同性愛を表すと、破局に向かうことを想像している：「僕の家族は風化する」、「母は死ぬ」、「母は入院する」などと。ゲイ・バーの“マスター”でも家族に自分の性的指向を隠している。「焼き鳥屋をやっている」や「ホステスのバーで働いている」と言いながら、ばれないように大変努力している。

最も強く現れてくる気持ちは、家族、特に両親に迷惑をかけないことである：「両親はまだいいけど、隣人にどういう風に隠せばいいの?」、「両親の恥を避けたい」、「母は歳だから、このような迷惑をいけない」などと。従って、大勢の同性愛者は、家族から離れるように、都市へ移動するわけである。多くの場合では、同性愛者たちは、両親が息子の性的指向を知っているという証拠を持っているが、誰も何も言わない。

さらに、男女の性別での生活の仕方のせいで、日本でゲイとしての自分を隠すのは、比較的簡単である。だから、日本が同性愛者たちなどに対して厳しいと判断しても、前述のインタビューを受けた人の内、2人を除いてほかは皆、個人的に差別を受けたことはないと言って、もし同性愛者が自分の性的指向を隠せば日本の社会に生きるのが簡単であると主張している。この状況こそは、別の民族的・社会的なマイノリティが毎日のように経験していることであろう。ゲイの生活の秘密の側面が良くて、日常生活が面白くなる

方法であると思っている人々も珍しくない。そうすると、夜の世界は、打ち明けられないほど秘められた様々な快樂の隠れ場、一種の秘密の庭になる。その意味だけで同性愛者たちは、しばしば優越感を感じている。

この意味では、同性愛者が社会に対して極めて忍耐力のあるところを示していると考えられる。すなわち、侮辱やたちの悪い冗談の存在にもかかわらず、オープンに自分の同性愛性を生かすことができるということよりも、自分の家族を心配しながら、家族の平和や社会的な秩序を優先して、差別をあまり感じていないらしい。

### 3.3. 相違・特性

自分が同性愛者であるという意識は、10～11歳のころ最初の自慰（他人と一緒にだったら、しばしば学校で、希に大人と）のときか、16～17歳のころ最初の性的関係のときなどに現れてくる。そのころ、ゲイ雑誌またあるいは“お兄さん”のタイプの年上の人との愛撫は、性的指向を明かにするものになる可能性がある。最初の同性愛上の性的関係は、12歳と29歳（平均18.5歳）の間で、スポーツ後のロッカーであるいは学校の旅行の際に高校の友人と一緒に（50%）か、公園や公衆トイレで未知の人と一緒に（50%）に行われている。家族範囲で行われたのは、2人だけだった。25%の場合では、女性との性的関係の後で行われていた。このような関係は、全ての場合で“物足りなく”感じているにもかかわらず、決して同性愛を明らかにする現象とは見なされていない。

自分の同性愛を発見するときの反応は、殆どの場合、特に両親に対して、どうしても秘密として護らなければならないということである。例えば、「言うのは必要ではない」という言葉がライトモチーフのように出てきた。時々、ゲイたちは、“なおす”ために、女性と付き合う（「オカマをやめる！」）

「ノンケをやってみよう」が、長くても数カ月間しかできない。インタビューを受けた内の25%弱の同性愛者たちは、自分の性的指向に対して恥ずかしさを感じた・感じると認めていた。殆どの場合には、同性愛者たちは、自分が少し変か、はずれているもの、「変態」またあるいは「気違い」と感じている。が、自殺をしようと考えたのは、1人だけである。しかしながら、決まったコミュニティや文化に所属しないなど、このような差異に対して強く誇りを持っている。

日常生活で、日本の男性同性愛者の特徴は何であろうと聞くと、最もよく出てくる表現は、「街や地下鉄で男を見ること」またあるいは「女性を避けること」であり、つまり、性的な現象に関する諸行動である。この次に、異性愛者たちが持っていないさそうな、スタイル、ファッションに対する関心、何らかの芸術的なセンスなど、に関する答えがあった。

日本の場合は特にそうかも知れないが、ゲイのライフスタイルの特徴の一つは、何よりも二重生活を送るということである。一方では、昼間、仕事場にいるときや家族と一緒に過ごしているときの代表的なゲイは、異性愛者を演じながら隠している。他方では、夜、彼は、ゲイ・バーやゲイのラブ・ホテルで遊んだり、公園やサウナのようなハッテンバで男を探したりする。二つの全く別の世界に所属するという違いの感覚は、とてもはっきりして肯定的に受け入れられているし、これらの境界線割も明白である。従って、いわゆる二重生活という感覚は、時々昼間の生活で制限や自己検閲という形で現れている。日本の家庭内の一般的な関係の仕方が、特に夜の場合、このような生活の送り方をやや簡単に可能にする。ゲイ・ライフスタイルのもう一つの特徴は、簡単なセックスであり、10年前から著しく盛んになったインターネットや電話による伝言やより普段のハッテンバのような出会い方法の増加のせいである。

同性愛者の性格の特徴で、最もよく出てくる答えの中に、二つの傾向があって、一方では、“わがままや個人主義”（しばしば一緒であるのは日本の社会

では意味深いであろう)であり、他方では、“顕著に専門化された趣味”, “マニア的な側面”, “物事を極めること”である。つまり、ある歌手や芸術的な活動, 特別な品物に対して夢中になること, ある西洋の諸文化に対する過度の好みという例がある。このような二つの特徴の組み合わせは、男性の異性愛の世界, もしくは日本の全社会に存在している主な価値観とは対立していると判断できる。

### 3.4. 結 婚

押し付けられた沈黙と同じように、結婚というのは、特に25~35歳の同性愛者たちにとって最もよく悩まされる問題の一つである。時々、子供願望と結びついている。社会の異性愛主義的な圧力に対して、同性愛者たちは殆ど誰でも、ある時に、その問題を取り扱っている。この現象は、特にイエに対する義務を負っている一人息子の長男に該当している。つまり、イエの継続にとって、伝統的にソトマゴと呼ばれる外で結婚している娘の息子は、伝統的にウチマゴと呼ばれる祖母・祖父と一緒に住んでいる息子の息子よりも、位置が低く判断されている。インタビューを受けた同性愛者たちは、同性愛を隠すためか、家族の圧力のためか、75%が結婚するつもりであるとしても、お嫁さんになる女性に自分の性的指向を決して隠そうとはしていないのである。これは、はっきりと同性愛に対して理解のある奥さんを探せるゲイ雑誌での「結婚コーナー」を見ても分かるように、新しい傾向であるか? とにかく、同性愛者たちは、性的指向を隠しながら結婚した“先輩”に対して、大変厳しい言葉を表している: 「ひどい」, 「許せない」, 「裏切り」など。

### 3.5. ネットワークの重要性 —— 閉じた世界

#### 3.5.0. 友達や知り合い

インタビューを受けた同性愛者たちの半分以上は、仕事の世界以外では、同性愛者としか会わないと認めている。援用される理由は、まず異性愛者と一緒にいるというストレス（「適応しなきゃ」、「ごまかさなきゃ」「役を演じる」）、次に異性愛者たちの会話のつまらなさ（野球、女、結婚など）、さらに同性愛者の趣味や活動の相違（買い物、バーやクラブ、展覧会など）、またあるいは生活様式の差異のため、自然的に離れることである。大変親しい女性友達の存在について話していたゲイは非常に少なかった。これは、他の文化に見られる現象に比べたら、しかも日本ではいわゆる“オコゲ”というゲイに非常に深い興味を持っている女性が多く見られるので、不思議に思われる。が、女性たちがより簡単に男性の同性愛を理解できそうなものにもかかわらず、どうしても自分の性的指向を隠す強い意志から、そのことを説明できるかも知れない。

それに反して、インタビューを受けた同性愛者たちの25%は、特に街でオカマと一緒に歩くのを見られないように、つまり自分を護るために、いつも異性愛者としか会えないのである。

社会的通念と違って、恋人に貞節である同性愛者が多く見られる。40～50歳でも両親と一緒に住む同性愛者は珍しくないのである。時々1人で、希にカップルとして生活する。同性愛の恋人たちは、平均的に週1～2回会う。場所は、両親がいないとき、どちらかの家であり、それよりもラブ・ホテルである。

#### 3.5.1. ハッテンバ

公園やサウナ、映画館、セックス・ショップ、ゲイ・バーのような様々な

ハッテンバは、時間的・空間的に定義されている“ゲイの空間性”を限定する。新宿二丁目の場合では、専有的でもある。伝統的に最も往来の多い場所はゲイ・バーであり、最近では、インターネットや電話伝言のようなバーチャルの場所である。10年前に比べると、公園はゲイのハッテンバとしてあまり利用されなくなってきた。しかしながら、個人差が大きい。公園しか使わない同性愛者もいれば、バーへしか行かない人もいるし、またあるいは専有的にサウナを利用する人間も見付けられる。全然ゲイ的なトコロへは出掛けない、あるいは、自分の家から離れた所へしか行かない同性愛者もいる。

日本のゲイ・バーというのは、特別な概念である。大体の場合では、アメリカやヨーロッパと違って、未知の人には閉ざされて<sup>7)</sup>、ただの軟派の場所よりも熱烈な所でありながら、ゲイ・コミュニティについての情報を得るために友達同士で会えたり、つまり社会化の中心である。

パリでも、新宿二丁目みたいな所がある。20年以上前からル・マレ (Le Marais) 地方は、ゲイのスペースとして認められている。最近、レ・アル (Les Halles) の方へだんだん広がっている。ゲイのレストラン、喫茶店 (オープン・カフェ) もそうだが、特にバー、クラブ、ディスコ、サウナの形でのハッテンバが増えてきた。

ル・マレと二丁目の差は、

<u>marais</u>	対	<u>二丁目</u>
・一般的な雰囲気：ゲイだけではない		ほとんどゲイだけ
広い		狭い (高い)
自由な活動 / 行動 (仕種)		コソコソの感じ
明るい		暗い
・バーという概念：軟派するため		コミュニケーションするため
しゃべらない		高い社会性のある場所
/(SM 以外)		専門化された



このような自由は二つの意味、理由があつて、まず考え方の変化である。ゲイ・プライドや同性愛者の権利を守る会のキャンペーンなどのお陰で、ゲイ・バッシングというのは、非常に悪いことであるという意識が高まってきたし、とてもダサイというイメージがある。それは新しい社会的な現象である。要するに、人種差別と性的指向に対しての差別とは、同じように捉えられてきたわけである。全国的にもそうかも知れないが、特にパリ人、特に教育レベルの高い人々がそういう風に考えてきた。例えば、最近東京での裁判における弁護士の態度や発言（「オカマの世界では、皆が嘘つきだから」）は、現在のフランスでは考えられない。もう一つの理由は、特に日本に比べて、同性愛者たちの権利が明確に法律的に守られているということである。

### 3.5.2. 類型化

いわゆる“類型化”というのは、ゲイ・バーが顕著に例を示し、日本のゲイの世界の主な特徴の一つだと考えられる。ゲイ・ガイドブックには、全国のゲイ・バーが、一般の雰囲気（若者、短髪・ヒゲ、中年など）や客の年齢層、出会い方（若者同士、若者と中年、など）によって分類されている（男街マップ、2000）。ゲイの世界では、このような“タイプ”の分類から避けられなくて、誰でも自分の位置を見付けられる性欲の類型（ワカセン、デブセン、ガイセンなど）として作られている。確かにこれは、一生の恋人や一日だけのセックス・フレンドを探すときに、とても便利なものだと言えるであろう。

大都会では、バーの極度の多様性や専門性が見られる。その最も顕著な例は、新宿二丁目である。しかし、中型の町では、ゲイ・バーはあまり専門化されていない。専門化において、明白に分割の一番大きい基準は、同性愛者の年齢である。例えば静岡市では、それ以外の基準（体格、多毛性、国籍、性欲のタイプなど）を扱わずに、3軒のバーが主に若者に、3軒のバーが主に中年の人々に割り当てられている。ある程度、京都市でも同じような状況が存在している。那覇市では、静岡市と違ってゲイ・バーが多いから、二つの基準

で客を分布できる：年齢（3～4のグループ）と体格（3グループ）。従って、那覇のバーは、“テーマ”によって細かく分配されていて、そのマスターたちは、お互いの店を客に紹介し合う。

### 3.5.3. 新聞雑誌

日本のゲイ専用の新聞雑誌は、同性愛者たちにとって、アイデンティティの絆という役割を持っている。6冊の月刊のゲイ雑誌は、主な役割の一つが同性愛者間の出会いを可能にすることである。それぞれの号には、大きな部分が専門の案内広告に割り当てられている。しかし、読者たちが最も興味あるのは、特に写真や漫画、小説、ゲイ・コミュニティについての新情報であるらしい。これらの全雑誌は、日本のゲイ・コミュニティの非常に性的なイメージを与える。確かに、ヨーロッパやアメリカで見られる状況よりも、ポルノグラフィは、日本でのゲイ的生活の大きな部分になると感じる。

『アドニス』という最初の日本のゲイ雑誌は、1952年から1964年にかけて出版され、その後警察に禁止された（Hawkins, 1999）。ゲイ・コミュニティの圧力によって、『薔薇族』は、1971年から出版されて、現在2万～2.4万部刷られる。その次に、段々、他の雑誌がより専門化されて、続けている：1974年に美少年専用の『アドン』；1978年に『ザ・ケン』が1982年に『ザ・ゲイ』になって；1983年から2001年にかけてマッチョやデブ専の『サブ』；1984年にデブ専やフケ専の『サンソン』、より最近ではマッチョや筋肉専用の『G-men』の発刊ということである。

## 3.6. 活動主義の状況

東京や関西では、同性愛者の権利を守る目標のある会がいくつかあるけれども、アメリカほど専門化されたグループは少ない。

1986年に創立された「アカー」（OCCUR）は、その内で最も有名でありなが

ら、全国に350人のボランティアを含めている。その目標は、情報がとても希少だったときに、情報の資料の出版や主にアメリカの書物の翻訳、エイズなどの問題についてアドバイスなどを通じて、同性愛者たちが日本で自分の性的指向を生かすように助けてあげるということである。例えば1980年代から90年代には、エイズについての情報のキャンペーンを催したのは、アカーだけだった。それよりもアカーが有名になったのは、1997年に、同性愛に関連しているグループだから府中青年会館の利用を禁止していた東京都に対して裁判に勝ったからだった。日本で、同性愛に関連した人権を援用した最初の訴訟だった。

日本の同性愛者たちは、一般的にあまり政治化されてなく、活動主義的ではない。これは、同性愛の世界では、秘密の文化や時には勇気不足、アカーのような活動主義のグループに対しての信用不足あるいはそれらの単なる無知と結びつけなければならぬかも知れない。例えば、次のようなコメントを記録した：「法律的に戦うのは大事だけど、他人がやったらいい」、「俺と関係ないぞ」、「アカーが何も分かっていないような気がする。個人的な差異に関係なしで、皆がカミング・アウトをして欲しいだけなんだ」などである。

東京の2000年のゲイ・パレードは、2000人の参加者がいて、2001年には3000人がいたが、日本で今までで最も大勢の人々が集まったとしても、ヨーロッパやアメリカのゲイ・プライド（Gay Pride）に比べたら非常に少ないのである。

### 3.7. 最近の傾向

1992年には、主に都会の若い女性からのいわゆる「ゲイ・ブーム」が出現した。そのときに、同性愛についての書物や一般雑誌の中の特集が多く見られた。1992年から、同性愛というのは、一つの“課題”になってしまった。

しかも、社会的な影響も少なくなかった。例えば、二丁目の街や、月にただ一回のゲイ・ナイトを行う京都のナイトクラブで、「本当に同性愛者ですか？日本では難しくないのですか？」と丁寧に聞いていた若い女性に出会ったことがある。

ゲイ・コミュニティにおいて2000年7月は、「誇りの月」(July Pride 2000)と呼ばれていた。その際、主に東京で様々なイベントが行われた。最も目立っていたものは、「レズビアン&ゲイ映画祭」や「ゲイ・パレード」であった。映画祭には、千本えり実行委員長が言っているように、様々な性的指向の大勢の参加者がいた(千本えりのインタビュー記事が、2002年にフランスの雑誌『Daruma』に掲載された)。その年のプログラムは、前の年に反してゲイ文化の娯楽的な側面を主張しようとした若い組織者(18~25歳)の意志を反映していた。もちろんプログラムの中には遊戯的な面とともに、苦しみ、自殺、ゲイ・バッシング、日常の民族的・性的差別、殺人事件などが見受けられた。でも初めて、ゲイの世界の普通化、同性愛の文化の認知という目的が出現した。それと同時に、ややお固い形態の活動主義の拒絶、大勢のゲイから汚く感じられるバーとサウナの世界との距離化が見られる。映画祭の参加者は、普段二丁目のバーやサウナへ行く人々と少し違って、より優しくて、“普通”，より“ダサイ”と見なされるかも知れない。その上、映画祭の雰囲気は、例えばパリの「レズビアン&ゲイ映画祭」とも大変違って、より軽くて、あまり活動主義的ではなくて、より真面目ではないのである。

現代日本のレズビアンとゲイの世界は、変化の途中であるが、マスコミはそれについて沈黙のまま何も表現していない。しかし、それは驚くべきことではないかも知れない。一般に、日本社会は、せいぜいよくて、どんなマイノリティとも同じように、同性愛者たちについて無関心を示している。新しい世代は、1970~1980年代に活動が始まった活動主義の諸会と交代している。彼らは、活動主義を少し忘れながら、同性愛者たちを(再び)光のもとに置くこと、同性愛の普通化や遊戯的な側面を要求することという目的が

ある。

#### 4. 結論として

少なくとも類型化や結婚との関連などのようなゲイのアイデンティティのいくつかの要素が日本全体の社会・文化と平行しているということは、興味深いであろう。

性行動よりも、ライフスタイルの特徴や沈黙、新聞雑誌、ハッテンパとそこでの行動、類型化、結婚との関係などというものは、日本での男性的同性愛のいくつかの特徴になり、これらは、一つのひそかで曖昧なアイデンティティの構成要素になる。日本のゲイのアイデンティティというのは、ひそかだから強いもので、社会の異性愛主義的な圧力に消されているから比較的遅く構成されている。自分の個人的な差異を生かすことと、沈黙を守ることとの間に、一種のバランスが存在している。映画祭で見られるように、パーの世界の暗くて汚いイメージに反して、ゲイの新しい世代には、オープン性や明るさの傾向が徐々に出現している。このような運動のこれからの変遷は、非常に興味深いことである。

〔注〕

- 1) 元々「Coming out of the closet」（押し入れから出る）という表現で、家族、友達、同僚などに自分の同性愛を暴露するという意味である。
- 2) 使いやすくするために、得られた数字に、10000を掛けた。
- 3) 取り扱った市は、2000年の『男街マップ』というガイド・ブックに載っていた全てを研究対象にした。
- 4) 上位10市のGn：那覇9.70、松江6.12、博多5.90、今治5.04、東京23区4.99、岡山4.22、高松4.20、高崎4.17、石垣4.05、山形4.00。上位10都府県のGn：東京4.99、大阪3.58、沖縄2.84、福岡1.98、京都1.56、広島1.49、香川1.36、青森1.35、岡山1.33、宮城1.32。上位10市のh/b：那覇14.238、博多23.537、東京23区23.566、名古屋32.262、大阪35.935、松江36.750、岡山38.500、広島45.958、高松47.571、

石垣 49.400, 札幌 49.778。上位 10 都道府県の h/b : 東京 23.566, 大阪 35.935, 沖縄 52.040, 福島 69.278, 広島 106.815, 愛知 107.292, 京都 114.522, 岡山 122.375, 北海道 126.667, 宮城 138.529。

- 5) 例えば、英語で「クイアー」など；フランス語で「ペデ」(pédé)；ドイツ語で「シュール」(Schwul)；イタリア語で「フェノッキオ」(fenocchio) など。
- 6) 社会的に許された・励まされた同性愛的な(性)行動の長い歴史の後、なぜこのような状況になったのかはまだきちんと研究されていない。同じように日本の性教育の教科書の変遷についての研究もまだ行われていない。
- 7) しかしながら 2000 年 4 月から、二丁目の中通りで 1 軒のオープンな喫茶店が開店した。

#### [参考文献]

- Hawkins, Joseph. 1999 年。「Adonis and the Rose Tribe: Japanese Gay Magazines and the Reconstruction of Identities (『アドニス』と薔薇族：日本のゲイ雑誌とアイデンティティの構築)」：『American Anthropological Association (アメリカの人類学会)』(シカゴ, 11 月 19 日)の学会で発表された文。
- 平塚良直, 1994 年『日本における男色の研究』人間の科学社, 151 頁
- 伊藤文学, 1993 年『薔薇族を散らせはしまい』批評社, 462 頁
- 岩田準一, 1973 年『男色文献書志』岩田貞雄, 371 頁
- Leupp, Gary P. (1995 年) 1997 年。『Male Colors. The Construction of Homosexuality in Tokugawa Japan (“男の色”。日本の徳川時代における同性愛の構築)』Berkeley-Los Angeles-London, University of California Press, 310 頁
- Lunsing, Wim. 2001 年。『Beyond Common Sense. Sexuality and Gender in Contemporary Japan (常識を超えて。現代日本のセクスマリティとジェンダー)』London, Kegan Paul, 410 頁
- 太田典禮, (1957 年) 1987 年『第三の性』人間の科学社, 435 頁
- 『男街マップ』2000 年, 海燕書房, 282 頁
- プロジェクト G, 1992 年『オトコノコのためのボーイフレンド (ゲイ・ハンドブック)』少年社, 208 頁
- クイア・スタディーズ編集委員会, 1996 年『クイア・スタディーズ'96。クイア・ジェネレーションの誕生』七つ森書館, 222 頁
- クイア・スタディーズ編集委員会, 1997 年『クイア・スタディーズ'97』七つ森書館, 254 頁
- 訳：暉峻康隆, 1976 年『西鶴全集』小学館, 12 冊
- 柴山肇, 1993 年『江戸男色考』批評社, 3 冊, 230 頁

現在の日本文化における男性同性愛（ローラン）

矢島正見, 1997年『男性同性愛者のライフヒストリー』学文社, 491頁

山本直介, 1998年『性の人権教育論』明石書店, 308頁